有機イチゴ農家による社会的公正の実現
――カリフォルニアの Swanton Berry Farm の事例から――
How an Organic Strawberry Farm Invests in Social Justice: The Case of Swanton Berry Farm in California

浅岡 みどり
ASAOKA Midori

Organic farming, begun as an alternative to industrial farming, is having a hard time as organic industrialized agriculture is now rapidly growing and globalizing. In order to survive, the farms are forced to enlarge their scale, employ a great number of immigrants, and neglect the well-being of workers. Critics have noted that there is wide variation in the working conditions and social justice in organic farming in California. This paper is a case study of Swanton Berry Farm in Santa Cruz, the first commercially viable organic strawberry farm in California. Tracing the history of the farm, placing it within the history of organic farming, and interviewing the owner Jim Cochran, I clarify Cochran's unique standpoint in the organic movement and his attempt to invest in social justice.

キーワード：有機農業（Organic Farming）、有機農業運動（Organic Movement）、社会的公正（Social Justice）、食の公正（Food Justice）、農業労働者（Farm Worker）

1. 有機農業の産業化とオーガニック[1]の意味の喪失

本稿の目的は、現在有機農業が世界的に産業化する中で、オルタナティブをめざした有機農家がどのように存続を可能にしてきたかを、カリフォルニアの先駆的な一有機農家の歩みをたどりながら明らかにすることである。このような問題提起をした理由は、現在有機農業をめぐって大きな変化が起きているからである。オーガニックには本来、生き物同士が有機的関係を結ぶという意味が込められていた。しかし、現在、産業化やグローバル化によってオーガニック農産物が安価になり広く普及して行く過程で、本来の意味が喪失されつつある。まずオーガニックの意味の変容を追うとともに現代的課題をみていきたい。

オーガニック（有機）の由来は、19 世紀イギリスにおいて「産業革命がもたらした社会の崩壊と原子論」に対し、有機的社会の「愛や協力」の存在を示した言葉で「産業の正反対の概念」であった（Pollan 2006＝2009: 191）。有機栽培は、化石燃料や化学肥料、農薬を基本とした工業的な大規模農業（慣行農業）がはじまってからオーガニックとして認識されるようになる。従来産業と対置してきたはずの有機農業は、現在有機農産物の市場価値の高まりにより大規模な産業化が進行している（Pollan 2006=2009）。とりわけアメリカ社会では、産業に対立的でないオーガニックの動向が端的に現れている。アメリカ農務省（以下 USDA）のオーガニックの定義[2]は自然の循環に準じた農法を用いるべきであることを規定しているだけで、社会的公正（後述する）には触れていない。これにより、有機農業の産業化は一層促進された（Guthman 2014）。

農薬の危険性を訴えたメディアに続いて、有機認証制度によりオーガニックは農薬を使用しない安全な食品という記号となり、本来のオーガニックの言説が変化し消費者に広がった。これが更に有機農業の産業化を後押しした（Pollan 2006=2009）。

国際的にもこのようなオーガニックの多様化に警鐘をならす意見があがっている。有機農業運動体 IFOAM は、2015 年に Organic3.0 を公表し、有機農業のあり方を問い直す「真に持続可能な農業と消費のあり方の追求」を目標に掲げている（桝潟 2017）。日本の有機農業運動においても、生産者と消費者の関係を有機的につなげる「提携」運動の停滞や、認証制度による基準を満たすための有機農法の効率化と有機農業の意味の喪失が指摘されている（桝潟 2008; 2017）。世界的にオーガニックの需要が高まる中、諸外国や日本においても有機農業の産業化がもたらす問題は、今後の課題となろう。

カリフォルニアにおいては、有機農業の産業化が急速に進行し、従来オルタナティブを求めて始めた有機農家が生き残りをかけた選択[3]を迫られている（Guthman 2014）。結論を先取りするならば、本稿で扱う Swanton Berry Farm は、労働者の社会的公正に力を注ぐことで農場を成り立たせてきた。本稿では、聞き取り調査[4]をもとに Swanton Berry Farm が農場設立当初から社会的公正を求めてきた道筋を示していく。次章では、カリフォルニアの農業の歴史と有機農業の始まり、Swanton Berry Farm を概観していこう。

2. カリフォルニアの農業と Swanton Berry Farm

カリフォルニアの農業は 1880 年代から大陸横断鉄道の開通とともにヨーロッパへの輸出を前提とした産業として成り立ってきた。機械化した大規模な小麦栽培による土壌の劣化により、小規模な果樹栽培に転換したカリフォルニアの農業は、果樹の収穫期には、多くの場合不法移民の季節労働者を雇ってきた歴史がある（Olmstead & Rhode 2017）。一方、アメリカにおける有機農業運動は 1960 年代に若者の間で巻き起こったカウンターカルチャーから生まれ、産業農業への抵抗から発展し、アメリカの消費文化と相まって成長してきた（竹林 2014）。2015 年の調査によると、アメリカの有機農産物の販売高は世界 1 位で、有機農業の耕作面積は世界 3 位である（BIOFACH and VIVANESS 2017）。中でも農業地帯のカリフォルニアのオーガニック農産物の販売高は、2014 年の調査においてアメリカの中で首位を占めている（USDA 2015）。

現在カリフォルニアは、市場価値の高まりにより産業化した有機農業と、カウンターカルチャーの影響を受けて産業化に抵抗した有機農業の狭間で揺れている。いずれも日本の農家のような家族農業ではなく、農作業は移民労働者に頼っている。農業全体でみると、カリフォルニアの農家一戸の平均面積は、日本の農家の平均面積の約 54 倍[5]あり、カリフォルニアの農業は商業として成り立たなければ農家としての存続は難しい。

Swanton Berry Farm の経営者 Jim Cochran は現在 70 歳を迎えた白人で、「私は環境と社会的公正（Social Justice）で戦ってきた」（2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）と自らの有機イチゴ農家としての人生を振り返える。Cochran は、カウンターカルチャーがカリフォルニアで巻き起こった時代にサンタクルーズで学生生活を送り、協同組合のマネージメント業を経て、1983 年に友人と 2 人で Swanton Berry Farm を設立した。農場設立後は有機農業と労働環境の改善に力を注ぎ、有機イチゴ農家として成功を収めている。まず農業経営を成り立たせてきた Swanton Berry Farm 周辺の自然環境と立地、現在の様子を紹介したい。

カリフォルニア中央沿岸地域は、年間を通して穏やかな地中海性気候がイチゴ栽培に最適で、世界有数のイチゴの生産地である。カリフォルニアの気候では、3 月から 10 月までイチゴが実るので、長期間収穫することができる。2017 年には、カリフォルニアの農産物の売上高で、イチゴは第 4 位の主要農産物になっている（CDFA 2018）。カリフォルニア州サンタクルーズ市内から海岸沿いのクラシックハイウェイ 1 号線を車で北に走ると 13 マイル（20 分）ほどで、手作りの巨大なイチゴの形をした木の看板が見える。これが Swanton Berry Farm である。イチゴが収穫しやすいように高畝にした畑と休耕の畑が広がり、一般客はイチゴ摘みをして、ピクニックなどを楽しみ、一日を過ごすことができる。木造平屋の売店には新鮮なイチゴや野菜、農場で収穫したベリー類を、併設されたキッチンで加工したジャム、ベリーパイ、ストロベリーショートケーキなどが並ぶ。裏手には、労働者の宿泊施設と自給用のキッチンガーデンがある。

2018 年冬に Swanton Berry Farm を訪れるとトンカチと板を持った 2 人の労働者が放し飼いになっている鶏 5 羽の小屋をつくっていた。3 月～11 月の収穫期にくらべて冬は時間の余裕があるので、天候に合わせて農作業をしている。その日はちょうど雨上がりで土が濡れていて農作業ができないので自由時間なのだという。鶏が行き交う中、瓶ビールを飲みながら、まるで慣れないお父さんたちが知恵を出し合って日曜大工をしているような様子であった。

現在 Swanton Berry Farm の農場は耕作面積 60ac[6]で、USDA が定める家族農業の中で大きい規模に該当する年間総売り上げ[7]がある。社会保障が充実している 20～25 人のフルタイムの従業員と、ファーマーズマーケットで販売を担当する 6～10 人が週に 1 日～2 日のパートタイムとして働いている。フルタイムのうち、技能にあわせて平等に労働時間で給与が支給される。Cochran は経営者であるが、労働時間を減らしているため、2 人のマネージャーよりも給料が低く、会社で 3 番目の収入だという。農場は有機認証 CCOF（California Certified Organic Farmers）[8]に加えて、ユニオンラベル（Union Label）[9]や食の公正の認証（Food Justice Certification）[10]も取得し、農場の理念を消費者に示している。次章からは Cochran がオーガニックを通して取り組んだ有機農業と、労働者の社会的公正の 2 つの取り組みを、Swanton Berry Farm の変遷と Cochran の生活や思想と共に歴史の流れの中で追っていく。

3. 労働問題に着目して有機農業をはじめる

（1）環境運動、カウンターカルチャー、公民権運動がオーガニックを生む

Swanton Berry Farm 設立前、Cochran が学生だった 1960 年代～70 年代は環境運動や学生運動が盛んな時代であった。レイチェル・カーソンの『沈黙の春』が 1962 年に発表され、DDT などの農薬による環境への被害が示されると市民の関心は環境運動へ移行していく。同時期、1960 年代の公民権運動から生まれた学生運動、エコフェミニズム運動、さらにベトナム反戦運動など、若者が先導したカウンターカルチャーが環境運動の影響を受けて有機農業に向かわせた（Obach 2015）。カリフォルニア大学サンタクルーズ校（以下 UCSC）の学内に設けたオーガニックガーデンができてから、サンタクルーズは徐々にカリフォルニアの有機農業運動の中心になっていく（Guthman 2014）。当時、サンタクルーズの UCSC の学生だった Cochran は移民労働者のキャンプで働きながら、カウンターカルチャー世代に広く読まれた『ホールアースカタログ』[11]に感化され、自分の家を建てることに夢中だった。また Cochran は、有機農業の存在を UCSC のガーデンと本によって知っていた（2018 年 9 月 1 日聞き取り調査）。

(2) Swanton Berry Farm 設立前、慣行農業の協同組合（Co-op）からの教訓

70 年代有機農業に取り組む前から Cochran は労働問題に関心があった。Swanton Berry Farm 設立前、Cochran は慣行農業を行う協同組合のコーディネーターをしていた。1970 年代には食品を扱う協同組合（フードコープ）が盛んになり、メディアと市場を通して人々の生活やモラルに影響を及ぼすようになった（Obach 2015）。当時のフードコープは、「カウンター・カルチャーの思想、哲学を反映した協同組合運動の新しい」動きとして、「オルタナティブな生活を実現したい人々、健康を重視した食品を求める人々が中心となって」（大山 2015: 140）各地に展開した。この頃、レストランや食料品店が食の重要性を提示し始めた（Obach 2015）。

Cochran が勤務していた協同組合は、農産物の質の管理、道具の管理、銀行からの融資などすべてにおいて、メンバー同士の合意形成によって運営方針を決めていた。Cochran は 19 家族を束ねていて、「彼らの稼ぎがよくなるようなアイデアを試した。しかし、収益は少なかったし、質も必ずしも良いとは言えなかった」（2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）。また常に議論が絶えず、理想的ではなかったと語っている。各々の技能に合わせて仕事が合理的に運ぶ時もあれば、議論になり統制がとれないこともしばしばあった。

マネージメントの重要性に気づいた Cochran は、協同組合での教訓を生かし、Swanton Berry Farm 設立時には新しいシステムの構築を試みている。それは、従業員の特性を把握し適材適所に人を配置すること。また Cochran に「次何をしたらいい？」と聞いてくる従業員に「あなたは、何をするべきだと思う？」と問い返すことで、指示を仰ぐのではなくそれぞれがその状況に応じて自ら考え決断を下すように促すものである。「彼らはそれを好んでいるよ。彼らが自分で決めている」（2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）と Cochran は語っている。この語りからも Cochran が労働者それぞれを信頼し、仕事を任せていることが伺える。

(3) Swanton Berry Farm 設立後、人に寄り添う労働条件へ変更

一般的にオーガニックは、無農薬で環境に負荷をかけない農法として理解されることが多い。しかし、Cochran は Swanton Berry Farm を設立してからオーガニックとして労働問題に取り組んでいる。現在、カリフォルニアの労働者のおよそ半分以上が認可されていない移民労働者であり、カリフォルニアの農業は移民労働者によって成り立っている（Martin 2013）。なかでもカリフォルニアで生産量が高いイチゴの収穫は、主にメキシコからの移民労働者に依存しているのが現状である。季節労働者は農場を次々と移動しながら働き、時給ではなく収穫物の重量に応じて支払われている（Guthman 2017）。イチゴの収穫は一日中、身をかがめながら行う重労働の上に、収量を上げるため効率が重視されてきた。そのため、労働者は 4～7 年で体がもたなくなる。更に労働者たちは、有害な農薬使用による健康被害など劣悪な労働条件のもと、安定した職場もなく働いてきた（Boaen 2014 年 9 月 5 日聞き取り調査）。

Seth Holmes（2013）のエスノグラフィーによると、カリフォルニアよりも北に位置するワシントン州の例では、1 時間にイチゴを 1000 個以上[12]収穫しないと、州の最低賃金を満たせないため、多くの労働者は仕事前に食事をとらず、作業中トイレに行く時間をなくし、午前 5:00～午後まで休みなく働く。契約労働者はイチゴ農家に 1 カ月に 350～400 人一度に配属され、収穫が終わるとブルーベリー農家へ移動して更に 3 カ月働く。季節労働者のほとんどは、キャンプ生活で南米から北へ移動しながら労働する。重労働による腰痛や怪我に加え数種類の農薬に曝され、具合が悪くなることもしばしばある。

1980 年代、Swanton Berry Farm で Cochran がイチゴの有機栽培を始めた動機は、農薬による健康被害をなくし資本主義経済と異なる、オルタナティブな農業の追求を目指したことにある。Cochran 本人も農薬散布後の農場に立ち入って、「手足のしびれが止まらなくなり、体が震え」（Cochran 2018 年 9 月 1 日聞き取り調査）倒れそうになった経験をもっていたので、有機栽培に切り変えたいと考えていた。また、Cochran は協同組合での教訓から「多くの人は一定の給料をもらって農場で働いて、自分の生活をコントロールしたいだろう」（Cochran 2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）と考え、給料の支払いを効率重視の出来高払いから時給へ変更した。このことにより、労働条件がよくなり収穫物の質の向上につながった。

> 給料の払い方は、箱あたりの出来高払いでなく、時間給にしてはじめました。そうすると収穫の効率や時間当たりの収穫量が減るわけです。労働者もゆっくり収穫するようになったので、全体の収入が減るかと思ったのですが、実をゆっくり収穫することで、よい実だけを採るようになったんです。普通だったら、急いで収穫しているのであまり見る時間もないし、熟してないものも採ってしまいます。時給で払うようになったら、ゆっくりと見分けながら収穫するようになりました。その結果、収量は減ったのですが、消費者たちが味のよさに気づいたのです。高い値段でここのイチゴを買ってくれるようになって、むしろ経営的にはよくなったのです。そういう形で初めて、労働者の怪我が減って、長く働けるようになりました。普通は 4 年～7 年しか続かないのですが、35 年も働いてくれている労働者がいます。その他、頻繁におきていた労働者の問題も減って、長く働くことで質が上がり、問題もよく見えるようになりました。（Boaen 2014 年 9 月 5 日聞き取り調査）

夏場の収穫期は Swanton Berry Farm の労働者は、午前 6:30～午後 5:00 以降まで働く。農作業は代々農業に従事していて慣れている人々にしかできないほど重労働で、白人を雇ったことがあるけれど、長続きしないと Cochran はいう（2018 年 9 月 1 日聞き取り調査）。労働者 B に仕事はどうかと尋ねると「それは重労働。野菜や果物の収穫、植えつけ、土を耕して、すべての農作業を行うから」と淡々と答えている（50 代男性 2018 年 1 月 30 日聞き取り調査）[13]。

（4）理解ある市場を求めて

1980 年代前半、オーガニックは人気もなければ、市場価値もなかった。手作りで家を建て、子どもがいないシンプルな暮らしが Cochran のオーガニックへの挑戦を経済的に可能にした。当時イチゴは、オーガニックであることよりも、良質であることが食料品店やレストランから評価された（Cochran 2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）。

Cochran は自ら市場探しに苦労するが、Swanton Berry Farm のイチゴは「香りも美しく、見た目も美しかった」（Cochran 2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）ので消費者に認められた。それは、オーガニックであったことに加えて、労働者を出来高払いの重労働から解放して、時給にしたことの成果でもあった。質のよいイチゴを持って食料品店を自らまわった。理解ある消費者に届くような市場を探すことに時間を費やした。2、3 年は少量しか売れなかったが、直接、食料品店と数軒のレストランをまわって 50 箱販売できるようになったと語っている。

4. イチゴの有機栽培体系化への道

Cochran が有機栽培への本格的な道を切り開いたのは、自分を含め労働者や子どもたちが日々農薬に曝されていたことへの不安と、共同研究を始めた UCSC の Steve Gliessman との出会いだった。1970～80 年代のカリフォルニアのイチゴ農家では農薬使用が当たり前で、農薬使用による人体への影響をだれも疑わなかった。サリナスの農家には有機栽培を試みる Cochran は狂っているといわれていた（Cochran 2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）。イチゴの慣行栽培において定植期に必ず使用する土壌燻蒸剤は、揮発性の有毒な農薬で、その散布は通常登録業者によって行われるが、近隣の住民、農業労働者に健康被害を与えることがある。土壌燻蒸剤のなかでも、特に臭化メチルは神経組織に影響を与えることがわかってきている（Harrison 2011）。臭化メチルはオゾン層破壊物質としてモントリオール議定書で国際的に利用と生産が規制されている。カリフォルニアでは 2017 年にようやくその利用が全廃された。慣行農業で農薬散布をした経験がある移民労働者 A は、メガネをしてフィルターつきのマスクを装着し仕事をすることは気分がよいものではなかったと述べ、「すべてオーガニックだと危険がない」（20 代男性 2018 年 1 月 30 日聞き取り調査）[13]と有機栽培のありがたみを語っている。

Cochran は農場の設立当初から有機栽培に取り組んでいたが、大学の研究者と共に有機農業の技術に向き合ったのは、カリフォルニアで初めての試みだった。当時、有機農業は農学の分野でも認識されていなかった。しかし、成果が公表されるとサンタクルーズから始まり、有機イチゴ農家が徐々に増加し、現在ではカリフォルニア州のイチゴ生産面積の 10％以上が有機栽培となっている（Townsend 2017）。

Cochran が農場を設立した 1980 年代は、専門職に就く人々の収入が上がり、世界旅行や移動の増加が健康への意識を高めた。その背景には栄養科学の進展があった（Guthman 2014）。1980 年代後半になると、オーガニックの人気が上昇し始める。1989 年に放映された人気ニュース番組で、リンゴに使用されている有毒な農薬に発がん性があるという報道で、小学校の給食からリンゴが消え、販売量が激減してリンゴ産業は大打撃をうける（The New York Times, July 9, 1991）。メディアの影響力は大きく、この騒動以降、消費者の間では農薬への危機感と健康志向が重なって、オーガニックへの関心が高まっていく（Guthman 2014; 大山 2015）。一方、国際的には、1987 年の国連ブルントラント委員会によって持続可能な開発概念が発信されたことで持続可能な農業について議論が進んだ。小規模、多品目栽培の持続可能な農業を推進するアグロエコロジー[14]の動きは 1980 年代後半から UCSC などを中心に地域へ広がりをみせるようになる（Gliessman 2014）。この大学と地域の協同の取り組みが、UCSC と Swanton Berry Farm の有機農業の実践と研究の融合として結実することになる。

Cochran は Gliessman との共同研究において、1987 年から 1990 年にかけて慣行農業と、薬剤を使わない有機農業の半々の圃場で比較試験を行った。その結果、有機栽培の方が投入するエネルギー量が少ないことが分かり、有機イチゴに特別の価格設定をすれば、商業的に成り立つことが実証された。次の段階として、有機農業を持続させるために、植物や土壌、昆虫などの生物の関係性から生態系の営みを農業に取り込んだ（Gliessman 2017）。特に、有機栽培における害虫駆除の方法は模索しなければならなかった。イチゴは花の時期にイチゴの害虫、ライガス（カメムシの一種）の被害にあうと果実が変形して販売できない。ライガスの駆除は、慣行農法では農薬をかけるが、有機栽培ではおとり植物を隣に植えて掃除機で吸い取る方法で対処

した。また、土壌の病気対策では、ブロッコリー栽培が土壌中のイチゴの病気を抑制していることがCochranの観察から発見され、Gliessmanと共に研究を重ね、畑の輪作を進めることで土壌病害を回避することが可能になった（Cochran 2018年9月1日聞き取り調査）。現在は土壌回復のため、イチゴは6年に1回のサイクルで、作付け前には必ずブロコリーなどのアブラナ科の植物を栽培している（Boaen 2014年9月5日聞き取り調査）。この農場では土地をトラストから安価に借りているため、このような輪作栽培が可能となる。

売店では輪作で育てた野菜類も販売していて、イチゴ以外の収入源になっている。その他にも背が高いヒマワリを植えることで風除けをし、花に授粉昆虫を誘導することでイチゴの実つきをよくするなど、様々な生物同士の関係を利用した農業を行っている。

5. 労働者の社会保障と会社所有権移行

オーガニックブームの一歩先を行くSwanton Berry Farmは、Gliessmanとの共同研究の成果により、1990年代になると有機栽培での生産量が安定し、独自の市場ルートも確実なものにしていた。更に労働者の社会保障が担保されることにより労働者の精神的安定にも繋がっていく。1990年からサンタクルーズでは、ファーマーズマーケットを開催し始め、生産者と消費者の間で、顔が見える関係を築くようになる（Santa Cruz Community Farmer's Markets 2017）。一方、アメリカの有機農業は前述した農薬が社会問題となったことを発端に、1990年代は大手食品会社がオーガニック部門へ参入し、産業化されていく。農産物が大量に出回るようになると、一般市民の間にオーガニックが広がりをみせはじめた（Pollan 2006=2009）。

移民労働者に頼ってきたCochranは、労働運動を先導してきたCesar Chavezの組合（Union Label）のメンバーが1990年ごろSwanton Berry Farmを訪れたことをきっかけに、労働者の社会保障の問題を具体的に考え始めている。労働組合はイチゴの農家や農業に関して前例がなかったので「まず正式な契約を結べるように労働者と雇用主、お互いの要求を明らかにして、安定した雇用体系、有給休暇、健康保険、残業の支払いなどの内容」（Boaen 2014年9月5日聞き取り調査）を考えた。

Swanton Berry Farmでは、イチゴの収穫期だけでなく一年中働けるように労働条件を改善した。Cochranは古い建物を掃除して、農場の脇に労働者が住めるように宿泊施設をつくった。2000年代になると労働者の社会的な地位の確立を目指し、会社所有の農機具などをトラストに入れて労働者の所有にする試みや、オーナーシップのシェアにも乗り出した。同時に株式を導入し、株の分配を労働者にすることで会社の所有権を移譲しようと試してきた（Cochran 2018年9月1日聞き取り調査）。有機農家で株式を導入した前例がないため、Swanton Berry Farmでは常に新しい方策を生み出し、その方針が変わっていく可能性があることを示唆している。

> このやり方をしているところは、他にないので、実はまだ、私たちも知らないことばかりで、常に変化しています。このやり方を続けるかどうかもわからないし、労働者や会社にとってもっとよい方法があったら変えようと思っています。私たちは、労働者が安定して会社にいられて、彼らが会社のオーナーシップを持つモデルをつくろうとしているところです。（Boaen 2014年9月5日聞き取り調査）。

2018 年には変化が訪れていた。株の運営管理費や会計士に支払う金額が高すぎるので、現在は株式ではない新たな方法に切り替える準備をしている。Cochran は「私はいい人生を送ってきたし、息子もそれを知っている」と述べ、息子はエンジニアの職に就いていて農場を継ぐ気はないので、後は今の労働者たちに農場を残したいと考えていると語っている（2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）。農家で株式を取り入れるところはまだ少ないと Cochran はいう。その理由を聞くと、定かではないが「だぶん、農家は分けることに抵抗がある。彼らはすべてを持ちたがる」（2018 年 1 月 30 日聞き取り調査）と説明している。Swanton Berry Farm は、次世代に継承できるのだろうか。新しい方策は、次世代の若者が考えるから心配していないと Cochran は楽観的にみている（2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）。

6. Swanton Berry Farm を成り立たせてきたもの

(1) カウンターカルチャー世代の価値観――生活の安定が信頼を築く

Cochran の農場運営に通底しているものは、経済的豊かさの追求ではなく、生活の安定やそれぞれの人生の目標に価値を置いてきたことである。それは、貧しさや不便さを楽しみ、仲間と共に自らの手で新たなものを創造していく力によって支えられている。その根底には人と人の信頼関係があった。1960～80 年代 Cochran は金銭的に余裕がなく、自ら家を建てると同時に手作りのシンプルな暮らしに楽しみを見出していた。仲間がいたことが暮らしを豊かにし、小さいグループで価値観を共有していた。現在はその輪が大きくなって有機農業運動を形成していると Cochran は語っている。

> 何か変化を起こす時は、一人ではなく、いつも集団だと思う。社会化するためには、お互い親密になれることが重要。とても大変だけれど、たくさんの楽しみもあった。一緒にパーティーをして。［中略］もし外の世界に敵意があったとしても、我々は小さいけれどお互いを強め合うのに十分なグループを持っていた。それは小さいグループだったけれど、しかしお互いを増強した。今は、それが大きなグループになって、そして実際に裕福で、もっと楽しい。人々にはロマンスがあるし、子どもがいて。今はそれがライフスタイルになっている。それはもっと魅力的に。（Cochran 2018 年 1 月 25 日聞き取り調査）

労働問題に向き合った農場経営の根底には、生活の安定に重きを置き、お互いを信頼しあう価値観がある。自分で家を建てられて、食物を自給でき、仲間がいるという自信がすべてを寛容に受け入れることを可能にしているのだろうか。現在、売店の裏側に宿泊施設を用意し、自給用のキッチンガーデンと鶏を飼って、労働者の生活に最低限必要なものを提供している。これは、1970 年代の Cochran が自らの生活に必要としていたもの一式である。休み時間に労働者が鶏小屋をつくっていたように、ここには、生きるために必要なものを自分の手で獲得し楽しんでいくためのヒントが隠されている。この価値観は Cochran や Swanton Berry Farm を通して、普遍的に労働者に受け継がれている。

同様に Swanton Berry Farm は消費者との間にも信頼関係を築いている。ファーマーズマーケットや地元レストランに直販することを通して消費者と顔が見える関係を結んできたことに加え、農場での販売も行っている。農場の店ではカントリーミュージックが流れ、ソファーや椅

子に座ってゆっくりデザートを楽しむことができる。イチゴ摘みにきた家族連れで賑わっていたり、老人がひとり本を読んでいたりする。他の店と異なり常に店員がいるわけではなく、自分で計算して、ドル札ごとに仕分けされた箱に支払う。売店での無人販売は、「農場の仕事が忙しいから」という理由で行っているが、消費者を信頼しないとできないことでもある。結果として、労働者も消費者も期待に応えるように仕向けられ、金銭のやりとりだけの関係ではなく、Swanton Berry Farm の一端を担っているような気持にさせられるのである。Cochran の農場経営はマネージメントに力を注ぎ、企業的な合理性をとり入れる一方、労働者を信頼し自由に判断させている。要するに、労働者も消費者も信頼できる仲間にしてしまう。労働の価値観を健康と生活の安定に置くことで、労働者は無意識にイチゴの成長を気遣い、質のよいイチゴを収穫し、消費者は「香りも美しく、見た目も美しい」完熟したイチゴの虜になる。これはオーガニックの言葉の由来である有機的社会の「愛や協力」の関係を体現しているともいえる。

(2) 労働問題の改善を軸にオーガニックの流れを生み出す

Swanton Berry Farm のオルタナティブな試みには、Cochran が言うように自然生態系に根差した有機農業と労働条件の改善の 2 つがある。歴史の流れの中で 2 つの実践を概観していくと Cochran は生活に根差した労働者の生活改善を軸に、有機農業を取り込みながら変化し、そのたびに決断を下していることがわかる。

有機農業についてみていくと、Swanton Berry Farm は最初から自らの健康と労働問題の改善のため有機農業に転換している。当時オーガニックの市場価値がなく、Cochran はシンプルライフと市場探しを強いられたが、イチゴの質の良さで常連の食料品店、レストラン、消費者を確保していく。1990 年代、有機農業の産業化が加速する頃には、一歩先を進んでいた Cochran は安定した消費者の確保と有機栽培の技術を向上させていた。このことで、オーガニックの産業化と競合せずに一歩先を歩んできた。

1970 年代 Cesar Chavez を中心として起きた労働運動は農業労働者の賃金の値上げを勝ち取った（Martine 2012）。一方、Swanton Berry Farm は農薬使用をやめ、労働条件を出来高払いから、時給に変更し、労働者の健康と生活の安定に価値を置いた。後に労働者は農園に併設された住宅に住むようになる。つまり、Swanton Berry Farm の労働問題の改善とは、労働運動のような賃金の値上げではなく、労働者の健康と生活の安定にあった。1990 年代になると Swanton Berry Farm は労働組合と話し合いながら農業者の福利厚生を考え、更に労働条件の改善を行う。このことによって、労働者の健康と生活の安定を制度的に強化した。また「食の公正（Food Justice）」の認証をとることで、農業労働者の社会的公正に取り組んでいることを消費者に示していく。

時代の流れの中で、その時々に現れる事象に向き合いながら農園を発展させてきた Swanton Berry Farm のオーガニックは、労働者の健康と暮らしの安定を優先し、消費者と共に考え続けてきたことが商業的に成り立たせた鍵となった。Swanton Berry Farm は、このようにオーガニックムーブメントを創りだすことによって労働者の社会的公正の実現を試みてきた。

7. 結語――Swanton Berry Farm がめざす社会的公正

本稿では、有機農業が世界的に産業化する中で、オルタナティブをめざした有機農家がどのように存続を可能にしてきたかを、カリフォルニアの一有機農家の歩みをたどりながら明らか

にしてきた。その結果、産業化する有機農業とは異なる 3 つの特色が浮き彫りになった。第 1 に Swanton Berry Farm は、環境問題に向き合うだけではなく、労働問題に取り組んできたこと。第 2 に産業化した有機農業ではなしえなかった社会的公正の価値を創造してきたこと。第 3 に社会的公正という理念を通してオーガニックムーブメントを生み出してきたことである。

第 1 に Cochran は Swanton Berry Farm の農場経営を通して、環境問題に向き合うと同時に労働問題の改善にあたってきた。Cochran はオーガニックにおいて「みんな虫がどのように扱われているかについて気にするが、誰も労働者がどのように扱われているか気にしていない」（Obach 2015: 178）と述べ、消費者のオーガニックの認識において農薬への関心がある一方、労働問題が置き去りにされていることを指摘している。アメリカの USDA のオーガニックの定義においても、自然生態系に準じた栽培法に対する規定があるが、労働問題や社会的な受容性に関する規定がない。規定と消費動向に左右される産業化したオーガニックは、労働者の健康を奪い、過酷な労働の上に安価なオーガニックの実現を可能にしてきた。しかし Swanton Berry Farm は生き物同士の関係を生かした有機農法と労働問題の改善の両者を通してオーガニックを意味づけることで、産業化したオーガニックと大きく異なることを示している。

第 2 に Swanton Berry Farm は農薬使用をやめ有機農業の技術を向上させることで社会的公正の実現を試みてきた。さらに Cochran のオーガニックは、労働者と消費者との関係を築きながら変遷を遂げてきた。そこには、常に「誰もが生きるために必要なものを提供する」公平な視点が働いていた。つまり労働者の健康や生活の安定を担保することで、オーナーも含め労働者や消費者を同じ土俵に載せ、お互いの信頼を当たり前のものとする関係を結んできたのである。Swanton Berry Farm は本来オーガニックが含意する、信頼に基づく有機的関係を築いてきた結果、産業化した有機農業でなしえなかった社会的公正の価値を創造することができた。

第 3 に Cochran は時代に抗うというよりも、農薬問題や労働問題など目の前に起きる社会状況をつぶさに観察し、時代の流れを肯定的に捉えながら自らの手でオーガニックムーブメントを生み出してきた。現在も Swanton Berry Farm は、労働者への所有権の移行を考えたり、株式の導入を断念したり、常に試行錯誤を繰り返している。すなわち労働者の生活の安定を軸に、状況に応じてたゆまぬ変化を続けることで、オーガニックムーブメントの先端に立ち、流れを生み出すことによって、有機農業の産業化にオルタナティブな在り方を提示してきたのである。

これまで産業化した有機農業に、環境問題と労働問題に向き合うことで対峙してきた Swanton Berry Farm の試みをみてきた。どこよりも有機農業の産業化が進んでいるカリフォルニアの事例が世界や日本の有機農業に何を提示しているのだろうか。これからも、消費者は安心安全で環境に配慮し、更に安価に手に入るオーガニックに目を向けるであろう。しかし、その裏側には労働者の健康や生活を無視した産業化の問題が潜んでいる。なぜならば産業の究極の目的は経済的利益にあるからである。これからの有機農業の課題は、利益の追求や環境問題に向き合うだけでは解決しない。農業者、労働者、消費者も含め、そこに関わる人々の有機的つながりを確保できるかにも目を向けなくてはならないのである。

註

(1) 日本の有機農業運動とアメリカの有機農業運動との間にその成り立ちや意味が異なるため、本稿では一般に有機農業や有機農産物を総称して呼ぶ場合に、オーガニックを使用する。

(2) 1995 年に USDA の National Organic Standards Board（NOSB）によって「有機農業とは生態系に準じた

生産物のマネージメントシステムで、生物多様性、生物循環、土壌生物の活動を促進し強化するものである。これは、農場外から最小限のミネラルの投入と農業実践による土壌回復により、生態系の調和を保つことを基本としている」と定義された（Koenig and Baker 2002）。

(3) 小規模農家はファーマーズマーケットやCSA（Community Supported Agriculture）などの直売を通じて消費者と関係を築き、産業化と対峙している。CSAは、Henderson, E, En,R, 1999, *Sharing the Harvest：A Citizen's Guide to Community supported Agriculture*, VT： Chelsea Green Publishing Company. を参照。

(4) 本調査は2010年～2018年8月末～9月初旬の1週間の教育プログラム（計7回）に日本人大学生（約15名）の引率として同行した中で、参与観察をしたものと、2018年1月25日、30日と9月1日にCochranへ行ったインタビューをあわせたものである。2014年9月5日訪問時に農場の説明をしてくれたマネージャーのBarrett Boaenの語りは、有機農業研究者の村本穣司氏の通訳によるもの。

(5) 2012年のカリフォルニアの農家一戸の平均面積は326ac=約132.7ha（USDA 2018a）。2018年の日本の農家一戸当たりの平均耕作面積が2.46haである（農林水産省 2018）。

(6) 農場借地面積130ac中、30acは輪作のため、40acは水不足で灌水不可のため休耕中。耕作地60acのうち10acがイチゴ栽培、6acは他のベリー類、残りは野菜栽培。（2018年11月5日Cochranからのメールにて情報収得）。この農場の耕作面積は日本の農家一戸当たりの平均耕作面積の約10倍。

(7) Swanton Berry Farmの年間総売上高は約＄2,000,000（2018年11月6日Cochranからのメールにて情報収得）。USDA（2018b）の分類で大規模家族農家（年間＄1,000,000～＄4,999,999売上）に該当。

(8) 1973年設立した有機栽培認証組織。CCOF, 2018,（Retrieved August 20, 2018, https://www.ccof.org/）.

(9) アメリカの労働組合。Union Label, 2018,（Retrieved August 20, 2018, https://unionlabel.org/about-us/）.

(10) 農場から販売に関わる労働者のエンパワメント、公正性と公平性を探求する団体（Food Justice 2018）。

(11) 1968年～1972年に出版された雑誌。Back to the Land Movementとインターネットによるグローバルコミュニティにより挑戦的で、包括的な世界観を提供（The Whole Earth Catalog 2018）。

(12) 収穫量1 lb（パウンド）に＄0.14の支払い。1lb＝約453g（5個＝100gで約22個）の計算で、1時間にイチゴ51 lb（約1120個）を収穫しないと州の最低賃金＄7.16を満たせない。

(13) スペイン語から英語の通訳を交えた聞き取り調査を2018年1月30日に行った。

(14) 生態系の概念や原理を持続可能なフードシステムのデザインと管理に応用する学問（Gliessman 2014）。

参考文献

BIOFACH and VIVANESS, 2017, "The world of organic agriculture 2017",（Retrieved August 19, 2018, https://www.ifoam.bio/sites/default/files/press-release-world-2017-english.pdf. ）.

Carson, R., [1962], 2002 , *Silent Spring*, Hougton Mifflin Company,（=1974, 青樹築一訳,『沈黙の春』新潮文庫.）

CDFA, 2018, "California Agricultural Production Statistics", (Retrieved December, 10, 2018, https://www.cdfa.ca.gov/statistics/）.

Food Justice Certification, 2018,"What We Do"Agricultural Justice Project,（Retrieved August 20, 2018, https://www.agriculturaljusticeproject.org/en/about/）.

Gliessman, S. R., 2014, *Agroecology: The Ecology of Sustainable Food Systems*, Florida, CRC Press.

————, S. R., 2017,"Agroecology and Food System Change: A Case Study of Strawberries in California, The United States of America", Brescia, S. eds., *Fertile Ground: Scaling Agroecology from the Ground Up*,. Oakland CA: Food First Book, 87-103.

Guthman, J., 2014, *Agrarian Dreams: the paradox of organic*. 2nd edition, Oakland, California: University of California

Press.
————, 2017, “Paradox of the Border: Labor Shortages and Farmworker Minor Agency in Reworking California’s Strawberry Fields”, *Economic Geography*, 93:1, 24-43, Routledge Taylor&Fransis Group.
Harrison, J., 2011, *Pesticide Drift and the Pursuit of Environmental Justice*, Cambridge, MA, Emshoff, Corvallis: Oregon State University Press.
Holmes,S,M., 2013, *Fresh Fruit, Broken Bodies Migrant Farmers in The United State*, Berkeley and Los Angeles, California: University of California Press.
Koenig, R., and Baker, B., 2002, “U.S. National Organic Program Standards: Implications for Researchers, APS*net* Features.”（Retrieved September 9, 2018, http://www.apsnet.org/publications/apsnetfeatures/Pages/Organics.aspx）.
Martine, P., 2012, Immigration and Farm Labor: Policy Options and Consequences, Oxford University Press behalf of Agricultural and Applied Economics Association,　（Retrieved July 22, 2018, http://academic.oup.com/ajae/article-abstract/95/2/470/71118）.
————, 2013, “Immigration reform and California agriculture” *California Agriculture*, 67(4):196-198.　（Retrieved July 22, 2018, http://calag.ucanr.edu/Archive/?article=ca.v067n04p196）.
桝潟俊子, 2008,『有機農業運動と〈提携〉のネットワーク』新曜社.
————, 2017,「有機農業運動の展開にみる〈持続可能な本来農業〉の展開」『環境社会学研究』 22, 5-24, 環境社会学会.
農林水産省, 2018,「農地に関する統計」(2018 年 11 月 8 日収得 http://www.maff.go.jp/j/tokei/sihyo/data/10.html）.
Obach, B., 2015, *Organic Struggle* Cambridge, Massachusetts: Massachusetts Institute of Technology. The MIT Press.
Olmstead, A., and Rhode,P.W., 2017, “A History of Agriculture”, GIANNINI FOUNDATION of agricultural Economics, University of California Agriculture and Natural Resources.（Retrieved September 10, 2018 , https://s.giannini.ucop.edu/uploads/giannini_public/19/41/194166a6-cfde-4013-ae55-3e8df86d44d0/a_history_of_california_agriculture.pdf）.
大山利男, 2015,「アメリカの有機農業――「オーガニック」を超えて「ローカル」へ」中島紀一・大山利男・石井圭一・金氣興『有機農業がひらく可能性――アジア・アメリカ・ヨーロッパ』ミネルヴァ書房. 133-77.
Pollan, M., 2006, *The Omnvore’s Dilemma: ANatural History of Four Meals*, The Penguin Press.（= 2009, ラッセル秀子訳, 『雑食動物のジレンマ―グローバル経済がもたらしたもうひとつの危機』ダイヤモンド社.）
Santa Cruz Community Farmer’s Markets, 2017, “History”,(Retrieved September 10, 2018, http://www.santacruzfarmersmarket.org/about/history/）.
竹林修一, 2014,『カウンターカルチャー ――希望と失望の 1960 年代』大学教育出版.
The Whole Earth Catalog, 2018,（Retrieved August 18,2018, http://www.wholeearth.com/index.php）.
Townsend, P., 2017, “Strawberry fields for better”, *UC Santa Cruz Magazine,* （Retrieved August 20, 2018, https://magazine.ucsc.edu/2017/03/strawberry-fields-for-better/).
USDA, 2015, “Newsroom”,（Retrieved December, 10, 2018, https://www.nass.usda.gov/Newsroom/archive/2015/09_17_2015.php）.
USDA, 2018a, “California, Farm Characteristics Average farm size”,（Retrieved 2018.12.10, https://data.ers.usda.gov/reports.aspx?ID=17854#Pc52bd88e8e404bee8bad7ad743f5d456_3_428iT15C0x0）.
USDA, 2018b, “Farm Structure”,（Retrieved November 8, 2018, https://www.ers.usda.gov/topics/farm-economy/farm-structure-and-organization/farm-structure/）.